
GS - GANTZ STRATS

カルボナーラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GS - GANTZ STRATS

【Nコード】

N9865X

【作者名】

カルボナーラ

【あらすじ】

GANTZのミッション中に死んだ主人公が、ISの世界に転生する。それだけ。作者は小説を書くのが初めてです。不明な点、気になる点、誤字脱字、感想などありましたらお願いします

P r o l o g u e (前書き)

初めまして。カルボナーラと申します。

初めての投稿なのでいたらないところもありますが、よろしく願
いします

また、不明な点、気になる点、誤字脱字、感想などありましたらお
願いします

Prologue

とあるマンションの一室

そこには死んだはずの人間が集められ、「ガンツ」と呼ばれる黒い球体からミッションが与えられる

それは、星人を殺すこと

プロローグ

俺は闘ってきた

生き残るため

ただそれだけのために

あの日、俺は死んだはずだった

俺はただベッドの上でただ時間が過ぎるのを待っていた

動かすことの出来ない手足、しゃべることの出来ない口、痛みさえ感じない身体

いつしか俺は死を望んだ

何もすることの出来ない身体、生きているという実感すら存在しない日々

俺の心は壊れていった

以前は友達もいた

恋人もいた

生きていることが当たり前

こんな日々が続くのが当たり前
そう思っていた

でも今は自分さえいなくなつた

やがて俺は死んだ

あの日、俺は死ぬことが出来た

1話

俺の名は橘修也。

元ガンツによつて集められたガンツメンバーだ。
そう、「元」だ。

今の俺は……

「修ちゃん、ミルクのおじかんでちゅよ」

「あう」

赤ん坊だ。

1話

俺はガンツのミッション中に死んだはずだった。

壊れかけのガンツによって転送された先で俺の目に映ったのは、かわいらしい天使の石像たちが、その顔に笑みを浮かべながら、嬉々として人間の腕、足、首をもいでいく光景だった。

ローマの街が、多くのミッションを生き抜いてきた猛者たちの血で赤く染まっていた。

そんな地獄のようなミッションが終わり、転送が始まったとき、俺は左半身をこっそり失い、無様に横たわっていた。

俺が闘っていたのは、俺を憎悪でゆがんだ顔を向けている、ボスであろう巨大なダヴィデ像だった。

俺は捨て身の特攻でダヴィデ像の腕を奪うことに成功した。

だが、捨て身であったがゆえに、ダヴィデ像の目から放たれた光線をよけることが出来る筈もなく、左半身を失った。

そんな俺を食べようとダヴィデ像は頭を近づけてきた。

俺は痛みで狂いそうになるのをこらえながら、右手に持っていたガンツソードを伸ばした。

そしてそれは、Xガン、果てはZガンさえ効かないダヴィデ像の、数少ない弱点であろう目に突き刺さり、そのまま脳をも貫いた。

だが俺は目を押さえながら倒れていくダヴィデ像を見ることはなかった。

俺はこのとき、死んだ。

気がつけば死んだはずの俺は、赤ん坊になっていた。

……どうしてこなった

赤ん坊になつてから一年が過ぎた。

初めの頃は赤ん坊の生活はまるで昔の俺のようで、精神年齢が18歳となった今でも、とても憂鬱だった。

今ではだいぶ慣れてきたし、歩けるようになるのもそう遠くはないだろうから、かなりましではあったが。

- - - - -

ガンツに集められるよりも前、12歳の頃、俺は重病を患った。

その病気のせいで、俺の身体は動かなくなった。

何も見えない、音も聞こえない、身体は自分のものではないかのようにな動かない。

ただ時間がすぎるのを感じるだけの日々。

生きたいという望みさえ次第に失っていった。

こんな生きている実感さえない日々は、唐突に終わった。

目に光が、耳に音が、身体に自由が戻ってきた。

そんな俺の目がとらえたのは、何もないマンション一室で、唯一、異様な存在感を示す黒い巨大な球体。

これが俺とガンツの出会いであり、生きる意味を見つけた瞬間だった。

- - - - -

二度も身体を動かせない辛さを味わう目にあった俺は、中身は18歳であるにもかかわらず、ハイハイが出来るようになった日には、喜びのあまりハイハイしすぎて、生まれて一年で筋肉痛になり、情けないのか、逆にすごいのか、なんともいえない気分だった。

ともかく、ハイハイが出来るようになり、行動範囲の広がった俺は、身の周りの情報を集めた。

その結果わかったことと、今までの情報を重要なものでまとめると、俺の名前は以前と同じ橘修也であるということ。

両親の名前は以前と違い、母親が橘美穂から橘晶、父親が橘良弘から橘洋一になっていて見た目も違ったこと。

ここは日本だが、俺の知らない県名であるということ。

そして、俺の誕生日がああのだとミッションがあった日と同じであるということ。

これら情報から考えると俺はどうやら人生が振り出しに戻ったのではなく、死んだと同時に生まれ変わったということだろう。

なぜなのかは全く見当もつかないが。

だが俺はこの考えに到ったとき、理由なんかどうでもいいと思うほどの喜びを感じた。

なにせ、俺は病気を患ったせいで、まともな生活をしたことがなかった。

だから生まれ変わったのなら、新しい人生を普通に生きることが出来る、やる事が出来なかったことがやれる。

そういった未知への期待が俺にこんなにも喜びを与えた。

その日は一日中興奮していたため、次の日は母親が心配するほどねむりこけた。

ただその顔はとても微笑ましいものだった

1 話（後書き）

不明な点、気になる点、誤字脱字、感想などありましたらお願いします。

2話

転生してから6年、俺の日常は、出会いと再会によって、大きく歪む事になる。

「おひちぶりだす しゅうやん 元気にしでやがりましたか？」
「元気にしてたよ、少なくとも昨日まではね…」

小さくなった黒い球体が俺の前に現れたとき

「ガンッ」

俺の世界は大きく歪んでいく

2話

転生してから6年がたった。

早いことに、もうすぐ小学一年生だ。

えっ？時間が飛びすぎだっけ？

…この五年間はいろいろあったから、まとめて説明する。

2歳になるまで、俺は何の問題もなく暮らしていた。

そんな何の変哲もないが十分に充実した日々が壊れ始めるのに、時間がかからなかった。

両親関係が険悪になったのだ。

夜中に聞こえてくる怒鳴り声から、原因は育児に対する考えの食い違いのようだった。

父親は育児は女がするものだと言主張し、母親は二人で育てていききたいと言主張していた。

そんな関係が長続きするはずもなく、母親は俺を連れて家を出て、母親の実家に逃げた。

昼間は明るく振舞っていた母親は、俺を寝かせたと思うと、声を殺して泣いていた。

俺に弱弱しく、何度も何度も謝っていた。

母親の実家は、児童養護施設を運営していた。

実家に来てから、母親は働き始めたが、幼稚園に行かせるだけのお金がいりなかったため、俺はよく施設に預けられた。

施設では、幼稚園には行かず、小学校からという決まりらしく、俺

と同じ年の子が5人いた。

はじめは、子供に混ざって遊ぶということに対して、正直遠慮しなかったが、諦めて混ざってみると、思いに他、すぐに慣れた。

一度目の生で身体を動かせない苦しみを知っていたから、身体を自由に動かして遊ぶだけでも、人一倍喜びや楽しさを感じられたからだろう。

だが、施設での一番の楽しみは本を読むことだ。

施設には、18歳までの子供がいる。

そのため、施設にある小さな蔵書部屋には、絵本から、大学の入試問題集まで様々な本があった。

転生する前の世界では、俺は戸籍上死んだことになっていた。

だから学校に行くことも出来ず、制服を着ている学生を羨むような視線で見えていたことが多々あった。

だから本を読んで知識をつけることが楽しくて仕方なかった。

そうしているうちに、俺は段々と浮いた存在になっていた。

あまり外で遊ばず、本を読み漁っているような子に、誰が話しかけるだろうか。

ゆえにこの結果は当然であり、後悔もしていない。

今思えば、もっと人付き合いに積極的でもよかったかなと思わないでもないが、この五年間のうち、施設に入ってから俺は、十分に充実していた。

冒頭に戻り、俺はもうすぐ一年生だ。

俺と同じ年のやつらは、学校に行くのが待ちきれず、ランドセルを

背負ってはしゃいでいる。

入学式の日、俺たちは施設の責任者である俺の祖父に連れられ、学校まで行き、校門で記念写真を撮った。

その後、生徒は一度教室に集合しなければならぬらしく、俺たちはそれぞれの教室へ向かった。

教室を一通り見回してみたが、知っている顔はひとつもなかった。まあ当然か、などと自己解決していると、教室に先生が入ってきた。40代と思しき女性の先生は、軽く自己紹介を済ませると、生徒をうまくまとめながら体育館に誘導していった。

入学式が始まり、順番に体育館に入場していく。

そのとき、カメラをこちらに向けている親の中に、母親の姿はなかった。

仕事で仕方がないとはいえ、少しだけ寂しくなった。

そんな寂しさを引き飛ばすほど眠くなる校長の話が終わり、入学式は閉会した。

その後は教室で自己紹介の時間になった。

このとき俺は、6年ぶりにこの世界がどこかという問題にぶち当たるとは、少しも考えていなかった。

「それでは皆さん、今から自己紹介をしてもらいます。呼ばれたら、自分の苗字と名前と年、あとは言いたいことがあったら自分の好きなように言ってください。じゃあ最初は安藤君からね。はい、安藤君。」

「はい。えと、あんどうけいすけ、6さいです！好きな食べ物は何……」

こうして始まった自己紹介は何の問題もなく終わると思っていた。

……… よろしくおねがいします！」

「はい、ありがとう。」

パチパチ パチパチ

ここまでは問題はなかった。問題は次に自己紹介したこいつ…

「はい！おりむらいちか6さいです！えっと……よろしくおねがいします…！」

こいつが織斑一夏だということだ。

… ちょっと待て…！おかしいだろ、おい…！

今までもおかしい事だらけだったが、今回ほどおかしかったことはないぞ…？

百歩、いや千歩譲ってガンツのミッション中に死んだら、赤ん坊になつて人生をやり直すことになったとしても認めよう。

だが…！ガンツのミッション中に死んだら、ラノベの世界に赤ん坊になつて人生をやり直すことになっていたなんて事実を、認められるか…！！

ふざけなよ…！ガンツウウウウツ…！！

……… とりあえず落ち着くべきだ。

焦っていては、見えるはずのものまで見えなくなってしまう。

そつだ素数を数えよ…

「はい、じゃあ次は橘君」

「はは、はいっ！って、うわっ！？」

今まさに素数を数え始めようとしていた俺は、突然呼ばれた名前に反応し、咄嗟に返事をし、立ち上がるまではよかった。が、焦りに焦っていた俺は、足がもつれて、左に倒れてしまった

「いつて〜」

「あつ、だいじょうぶ？」

「あ、ああ、大丈夫」

「ほんとに？はい、つかまって」

そう言つて起き上がろうとした俺に手を出してくれたのは、左に座つていた、髪をポニーテールにしたかわいい女の子だった。名前は、…聞いていなかったが想像がついてしまった。

「助かった、ありがとう。えっと、篠ノ乃さん、だよね？」

「そつだよ。しののの ほうきだよ、よろしくね。」

どうやらこの世界にも神なんかいないようだ。

いたとしても絶対に信じない。

俺が転生してから6年、1つの大きな問題が解決された。

俺が今生きている世界は、…ISの世界だ

帰りは母親が迎えに来ていた。

俺は母親に手を引かれながら、歩いていたが、ほんの少し前に知った事実の衝撃で、妙に疲れていた。

そのせいで、俺はほとんどしゃべらずなかつたようで、途中で母親に「今日は行けなくてごめんなさい」と謝られてしまった。

そのあとは、これ以上余計な心配はかけるまいと、しゃべり続けた。施設に帰り着くと、母親は再び仕事に戻っていった。

どつと疲れていた俺は、蔵書部屋には目もくれず、自室へと向かった。

そして俺は再会した。

お下がりの俺の机に乗っている、黒い球体。

忘れもしない、俺に自由を与え、俺に生きる意味を与え、俺に二度も死を与えては生き返らせた黒い球体。

小さくなくてもなお、その異様な存在感を放つ黒い球体。

ガンツが再び俺を見つめていた。

「おおひちしぶりだす しゅうやん 元気にしでやがりましたか？
「元気にしてたよ、少なくとも昨日まではね、ガンツ」

ガンツは再び俺の前に現れた。

2 話（後書き）

不明な点、気になる点、誤字脱字、感想などありましたらお願いします

3話

3話

ガンツと再会した俺は、ガンツにあのミッションの後、俺がどうなったのかを知らされた。

まず、なぜ俺が赤ん坊になっていたか。

原因はわかったが、どの半分は俺の責任でもあった。

どうやら俺は、転送途中に死んだらしい。

そのせいで、死んでいる部分は転送できず、また、ガンツも故障していたため、生きている部分だけでしか身体を作りなおせなかったらしい。

その結果、俺の身体は赤ん坊になり、母親の子宮に転送されたというわけだ。

そしてもうひとつ、なぜ転送された世界がISの世界なのかについてだが、これも俺が転送中に死んだことが原因らしい。

生きている部分を作り直しながら、かつ転送先を子宮にでなければならなくなり、これを故障中のガンツが行うには無理があったように、転送がおざなりになり、偶然転送された先がISの世界だったというわけだ。

「こんな感ずで 理解しやがりますだか？」

「ああ、理解した。お前のおかげであり、お前のせいだっということがよくわかった。」

ガッツの説明でやっと自分の境遇を理解した俺は、昔の自分からは考えられないほど安心していた。

かつて死にさえ恐怖を感じなかった俺が、心のどこかで不安を感じていたという事実には、情けなさとおそれを覚えながらも、不安を感じていた自分に納得し、不安を感じれたことが嬉しかった。

死を恐怖しない人間。

それはもう死ぬことのない死人だけだ。

ゆえに死を恐怖できる。

それは俺が普通の人間に戻ることができたということの証明に他ならないのだから。

だが新たな問題も生まれた。
それは

「もう二度と見ないだろうと思っていたが、また随分とあっさり予想が外れたな」

俺を魅了してやまなかった力が、俺の手に戻ってきたのだ。

俺はガンツに集められてから、初めて生きる意味を見つけた。
それは星人を殺すことだった。

自分の身体が動かせるようになって、最初にやったことこそ、星人を殺すことだった。
はじめは怖かった。

すぐ近くに存在する死への恐怖と、動けるようになったのに死にた
くないという願望に突き動かされ、銃を持ち、星人を殺した。
何度目かのミッションで生き残ることが出来たとき、俺は死への恐
怖ではなく、死へのスリルを感じていることに気がついた。
いつしか、俺はこのゲームを楽しんでいたのだ。

そんな自分が怖くなった。

だがそんな恐怖さえ、すぐに消えていった。

なぜなら、動くことさえ出来なかった俺が、ガンツスーツの超人的
な力で強者である星人を殺す。

そんなことまで出来るようになった自分に、ただただ狂喜していた
からだ。

一度ゲームが始まれば、俺はそれを楽しんでいた。

そんなことを繰り返すうちに、俺は7回目の100点を取った。

それでも、このゲームから抜け出したいとは思わなかった。

殺しあうことに楽しみを感じ、その楽しみを失いたくなかった
それ以上に、このゲームから抜け出したら、また自由も、生きる意

味も失ってしまうのではないかという恐怖。
こんな俺に残った、唯一の恐怖が、俺をゲームに縛り続けていた。

俺は、スーツの感触、武器の重さ、冷たさを感じるうちに、昔のように闘いたいという、歪んだ欲望が芽生えてくるのがわかった。
そんな自分に吐き気がした。

俺は縛りのない身体の自由を持っている。

でも俺は闘いを望んでいた。

死がすぐそばに存在する闘いをだ。

結局、俺は変われてなどいなかったのだと。

変わった気になっていただけに過ぎなかったのだと。

ほんの数刻前に感じた嬉しさは、所詮まがい物の上に作られた虚像に過ぎなかったのだと。

俺はトイレに駆け込むと同時に、盛大に胃の中のものをぶちまけた。
一度出た涙は止まらなかった。
悔しくてたまらなかった。

この世界に転生して、出来なかったことが出来て喜んだ。
施設での生活は好きだった。

母親が入学式に来なかったことを寂しいと感じた。
でも全部まがい物だった。

俺の生きる意味は、何も変わっていなかった。

俺は力任せに壁を殴った。

どうにかして気を紛らわせたかった。

でも小さな身体では、自分に傷をつけることも出来ず、それが、俺には何も出来ないと言われていたようで、悔しくなり、何度も壁を殴った。

やがて殴る気力さえ失くした俺は、その場で気を失った。

目が覚めると、そこは俺の部屋だった。

服も別のものになっていた。

どうやらゲロと血で悲惨なことになっていた俺は、洗われた後、この部屋に運ばれたらしい。

いまだに残る吐き気と、こぶしの痛みが、意識を覚醒させていく。
意識が覚醒した俺は、気を失う前のことを思い出す。

その瞬間、再び吐き気が俺を襲う。

耐えられなくなった俺は、そばに用意されていた洗面器に、胃の中
のものを再びぶちまけた。

ようやく出し終えたとき、か細いノックと共に、母親が入ってきた。

母親の目は真っ赤で、頬には涙の跡がくつきりと残っていた。

母親は俺の意識が戻っていることに気がつく、俺を抱きしめた。

「修也…、ごめんなさい… ほんとうに…ごめんなさい」

母親は俺に消え入りそうな声で謝っていた。

違う、母さんのせいじゃない。

そう思っても、行き場のなかった俺の感情は、理不尽な怒りを感じ
ずにはいらなかった。

「なんでなんだよ… なんで俺はこんなに苦しまないといけないん
だよ… なんで普通の幸せさえ俺にはないんだよ… なんで俺は普
通の人間になれないんだよ…」

こんな理不尽な俺の言葉を、母親は静かに聴いてくれた。

「死んでやっつと、違う人間として、違う人生を、普通に過ごせると
思ったのに…」

「死んでやっつとって、修也、あなた… 死んだことが…」

自分の言ってしまった言葉に気づき、頭が一気にクリアになった。もう、後戻りは出来ない。

「そうだよ… 俺は死んだことがある。そして死ぬ前のことも覚えてる。」

「そうなのね… 通りで小さい頃から全然泣かなかったわけだわ。」

「そんな簡単に信じられるの？ それに信じるって事は、自分の子供じゃないって認めるってことなんだよ？」

酷いことを聞いている自覚はあった。

しかし母親は凜とした声でこれを否定した。

「それは違うわ。」

母親の抱きしめる力が少しだけ強くなった。

「あなたは私がおなかをいためて生んだ子よ。それは絶対に変わらない。」

「なんでそんなこと言えるの？ 俺には死ぬ前の世界には俺を生んだ母さんじゃない母親がいるんだよ？」

「そう、それも事実だわ。でもね、死ぬ前の世界にあなたを生んだ

母親がいるように、この世界でもあなたを生んだ母親はいるのよ」

どうやら母親は、俺が思っていた以上に、強い人だったらしい。

「俺は…母さんの子供でいいのかな？」

「当然よ。それにあなたが否定したとしても、あなたは私の子なのよ。」

「そうだったね… ありがとう… 母さん。少し、泣いてもいい？」

「ええ、いいわよ。」

俺は、感情のままに思いっきり泣いた

そのあと俺は、全部を話した。

12歳の頃に病気になり、それが原因で死んだこと。

そうしたらガンツに集められたこと。

ガンツとは何か。

ガンツのミッションで俺がしてきたこと。

ガンツのミッション中に死んだのが原因でこの世界に来たこと。

俺が気を失う前に何があったのか。

俺に関わることをすべてを話した。

話し終えた俺は、やっと変わることが出来た。

「人はいくつもの自分を持っている。そしてそのどれもがその人自身から生まれたもので、その人自身を表しているのよ。だから、今あなたがまがい物だと思っているものを、現実だと感じていた過去のあなたも、あなたから生まれた、あなた自身なのよ。そしてその自分自身を受け入れることが出来たとき、あなたは変われるはずよ。」

母がそう教えてくれたから。

俺はもう、変わることが出来た

3 話（後書き）

不明な点、気になる点、誤字脱字、感想などありましたら、お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9865x/>

GS - GANTZ STRATS

2011年10月30日01時16分発行